

灸は今字音にのみ云て、古名詳ならず、故まづ考るに、延喜式、和名抄、杯に、熟艾をやいはくさ、又やいくさ、杯訓、我陸奥の方言に、灸するを、やいひをやくと云、又其跡をやいとと云は、吾妻の大の方の言也、是は燒鎌をやいかまと云如く、古やきひと云けむを、後には、音便にくづれて、やいひと云、是に用る草を、やいはくさ、やいくさ、杯いひつらんと見ゆ、されば今やきひと云ぞ正しかる、文覺法師の消息、隆信集等に、灸をやいとと云、今京あたりの人も然云は、共に訛なるべし、さて右の二書に、さる名あるがらは、太古よりの術と見えて、軍防令にも、凡兵士每火云々、紺布幕一口、著裏、銅盤、小釜、隨得三口云々、火鑽一具、熟艾一斤とある、熟艾は火鑽と並いへれば、其料かともおもはるれど、猶灸の料なるべし。○中略

近き寶曆の比なれど、三宅意安と云し人の、古より驗あり、かつ正く傳來たる方等を撰たる、灸病鹽土傳と云あり、又名家灸選と云に、二神より傳し由の方を、是彼錄せるもあり、又中古の書、或は世間に傳はるが、漢にいたく異なりて、決く古方とおぼゆる多し。

〔春雨樓叢書〕異國の灸治

朝鮮の人、疾病なき時は、灸をするに及ずと云、一人として灸の痕あるはなし。阿蘭陀にても、近來日本より傳へたり、唐人も十人が十人ながら、三里及風門などに灸痕あるを見ず、此故を問へば、疾病なき故に、灸するに及ずと云。琉球人は、十人に九人は灸痕あり、玄かれども、日本人の如く、總身にはなし、只三里に多く見るなり、唐は都て灸の本なれども、日本の如く、宜しき事は傳へずと玄るべし。

〔拾芥抄〕下末灸治寸法以_一藁穗_一筋、手中指自_二本節_一至于前_二計_一之、其殘折棄、次_一又五分折棄、其一爲_二其人_一寸也。
〔撈海一得〕上灸ノ四花ヲ點ズルニ、足ニテ定ベキ程ヲ、女ハ腕ニ代ヘ用、是ハ葛可求ガ十藥神書三、婦女纏脚者非其生成、故以手取之ト云ヲ謬解シタルニヤ、纏脚トハ、宋ノ中葉ヨリ、貴女娼妓ノ類